

百九十四
奇均しと手を合せて拜みました如何にも講證たことであります

○一休の破戒哲理問合

是れの一休が堅田の草庵に居た時の事でござりましたが其草庵の海岸に
あつたことでござつたれば遊戯心半ばや日毎に釣竿を持ち行き之を
淵に垂れて小魚を釣りして喰ひれますれば開が弟子の僧達或は一休と友
たる僧徒之を見もしつ聞きもして這の沙門の身もあるまじきことである
と皆共興共に一休を一室に招きて甚く之れを異見を加へましたるは一休
の云ふより「是れは」各々方の異見其志の最と忝きことであるが
併し其學識の餘り感心仕つたことでのさらぬ抑も各々方の日頃學問す
るとして何事かを學べるゝこととや各々方の極めて記聽惡しきと見えてを
ざる我等の唯だ古への祖師の眞似をしたることである左れば是れは之れ
又禪宗の一學問である我敢て例なきこと仕らず若し各々方古の例を知
らずとあらばお見せ申さんとして一休素より繪畫くこと器用でござれば

蜆子の海老を釣りに喰ふ所のさまを最ともありくと書れまして開が上
よ一首の歌を題せられました

古へのしかこき祖くの蜆を釣りし

我れはのみうて魚を釣り喰ふ

と斯くせん書付け右多くの僧達の前も差付け左わらぬ体にて居られます
れば皆さく其意の兎も角も先づ其繪を見て俗ても奇容ある繪である哉
左りどの又見事ある歌の書きぶりやと感ぜ縦さま横さまを見て居りまし
たが開が中よ一人の老僧冷笑つて云ふやうに「老」是れはしたり古への祖
師が蜆を釣り参りしとして貴僧の年齢猶ほ若きよ魚を釣り参らんこと中々
よ鵜の眞似する鳥よや類することとござる俗て貴僧は此の蜆子和尚の鵜
釣りて参りし其御心振を知ろしめざるゝか如何よ」と詰問しますれば一休
は少しも騒げる色もなく最と静かよ從容答へて申すより「俗てく奇
怪なる詰問を被ることとござる哉如何さま修僧の如き愚ある心よてい蜆

子が海老を喰ひし心根の合點まぬことござらう元來道よ於ての年
齡の老若のござらぬ若しも年齢の老いたるが悟道するにあらば門前の肥
滿犬も亦悟道すべきことであるが肥滿犬が悟道したと云ふことの未だ聞
かぬことござる好し假令其年齢の若くとも其心の老けたる者の早く悟
道することござる左れば世尊の三十成道と承る又我等が祖達摩大師の
幼き時般若多羅尊者の來られ光明最とも赫灼たる壁を持ち捧げ三人の皇
子達も見せ开が心を試みんとて之れは謂つて云ふやうの 般如何も各々
方の此の壁を寶とせられませるか」とあるは此時御兄子二人の 二「左れば
這の良き壁である世に又とさき寶であらう」と申されましたるは當時達摩
の七歳よてましましたたが最とも愛らしき櫻の苔の如く細やかある口もて
申さるゝやうの 達否や〜此の壁の世上普通の寶よて其の寶よての
ざらぬ智光の珠こそ眞の寶よてござる」とて彼の壁を座上に抛れましたれ
ば彼の尊者の大きい打ち蕪かれて云ふ 般斯る幼き身をもて此の如き金

玉の言を吐出さるゝの最とも不思議のことであるとして其名を達摩とい名
づけられましたは是れより以前の名の菩提多羅と申されたことござるが
緒て是れよりの其名を改めて達摩とい申されました抑も達摩とい萬事よ
達し通じて見かき立つたるやうある人ありとの意でござる斯様の例もあ
れば悟道の強ち取て年齢の老若に由らぬことござる若し老若ありと
すれば修僧の如き年齢の老いても其心の幼き者をこそ若輩未悟道人とい
申すことござる」と却て老僧の學識の足らぬを笑ひますれば老僧も人中
よて一本道れて稍々赤面して云ふやうの 老是れの一休殿貴僧の日頃の
輕口よ任せて申されたり如何も口どての云ふとも其心よての左様我の張
られぬことであらう何れとも貴僧の眞實觀子の觀參りし御心根を知り給
ふか恐らくの知らぬことであらうと申せば一休答へて云ふ 二「开の重ね
て云ふまでもかく我等能くも之を知つたることである」とあるは彼の老僧
傍らの衆僧を顧みて云ふやう 老各々方の如何も思召されますか禪宗

百九十八
い素と以心傳心でござれば争で鯢子の御心が知らるべき鯢子の心の鯢子
あらでい之を知ること得あらずたるを端の見る目で之を知るとい最と
淺果敢あることである』と冷笑ひますれば衆僧皆尤も同じカラ〜と打
ち笑ひて云ふやう 參成程御老僧の申さるゝ通り鯢子の御心の中々凡
人の知る所でござらぬ左るを一體殿い之を知ると云ふ抑も一體い
鯢子よ爲つて見たことがあるよや這の亦思ひも寄らぬことである』とある
よ一體之を聞いて云ふやうい 一『偕ても〜各々方の能くも揃つて思あ
ることを申さるゝことでのござらぬか我等の好し假令身鯢子よあらぬと
も其鯢子の心の能く知つたることである 參否や〜其れの肯へぬこと
である鯢子あらぬ者のあどか鯢子の御心が知られうや 一『左ればとよ其
事あれ各々方の此の一體が心に爲り給いねば我等が鯢子の心よありたる
かあらざるか質の知り申さぬことでのござらう』と云へば各々皆舌を
の根も動かす閉口して逃だされた如何も一休い達者あ辨舌で

百九十九
ざります
是れ又就いて一條の物語があります開の外までもござりませぬ昔し漢土
戰國の世は莊子と云ふ人と惠子と云ふ人がありましたが此の二人の最と
も洒落ある道學者で日頃互ひよ二さき友達で二人相會すれば談しもしつ
笑ひもして面白く學問の道も遊んだことでありました或る一日の事此の
兩人只ある深梁の上よ遊んで居りましたるよ折節色儺き魚が水面よ浮み
て從容とし彼方此方と泳ぎ廻つて居りました莊子之を見惠子を顧みて云
ふやうい 莊アレ〜惠子殿よ傍覽せられぬか彼の魚が從容として遊ん
で居るの何んど樂しやうでのござらぬか是れを取りも直さず魚の樂みで
ござらうよ 惠否や是れいまたり何をすすかと思へば異類の樂を語るの
能からぬことでのござる子の魚よていござらぬ魚よてあらぬ身の何とて魚
の樂が知られませうや這の思ひも寄らぬことである 莊否やとよ子の我
れでいあい何とて我が魚の樂さを知らぬと云ふことを知らうや 參成程

さう言へばさうである併しさう言へば猶ほ更ら子魚の樂みを知らぬことである开の亦何故あれば我れの子でいふ故に固より子を知らぬことである左れと子も亦固より魚でなければ子が魚の樂を知らぬと云ふことも亦明かきことでござる。燕是れいゝ際涯のさいことである請ふ子姑らく其本は返られよ好し假り又我れ魚もあらねば魚の樂を知らぬとせうか然らば子も亦我れもあらねば我が魚の樂を知らぬか知らぬか开を知るよ由なきことである左るを之を目して知らぬと斷言するの道も亦道理に適ひぬこと若し子が之を斷言し我れを決して魚の樂を知らぬ筈のさいと云ひ我れも亦魚の樂を健かよ知ると斷言することである』と申されて争ひましたが是れが眞の深梁の上の水掛論でござります今願ひますれば彼の堅田の草庵ある一休他僧問答と其趣きの男髮たることとござります何さま一考を要する哲理上の問答であります

○一休の判斷神通の推測

時の維れ五月雨の降りみ降らずみ定めあく一休和尚も最と徒然とて柴の戸を差し籠め端然として居られます所へ年齢の頃凡そ六十餘りと覺しき一人の男頭より宛然風の芭蕉か蜘蛛の巢も似たる一盞の破笠を頂き又足より恰も蜈蚣の如く又踏破りたる草鞋を穿れまして如何にも物思ひしげも憂ひ悲みたる面色もて来られ柴の扉をコン／＼と叩いて云ふやう 或如何も御坊様物申さんナト願ひのあつて参られました此處明けて下さりませ』と申せば一休之を聞いて内より應といらへをしやをら身を起して柴の扉を明け 一何誰でござるか先づ／＼是れへと請ひますれバ彼の男 或去來御免下されと云ひつゝ内より更ら又言葉を改めて申すやうに 或私に此の竟近き邊に居る者でござりまするが明日のナト志の日も當りまするが就ての知識を頼みたく候へますれば恐れながら和尚様を請ひ奉りておるをかある齋を参らせたく是れまでの参ったこととござります』と云ふ一休之を聞いて云ふやう 一开の最と易きことであ

る固より出家の身であれバ委細承知してござる面て又其處の何方までござるか』と問へバ彼の者答へて云ふやう 或左れば我家と申すの外でもござりませぬ濁川通り底抜柄杓町と申して隠れなき處でござる尋ねて出で下さらバ門は目標を下げて置きます程は必ず〜待ち入り奉ります』と申して其儘歸へられました一休跡もて熟々と思ふやう這の亦奇妙なる道案内の教へやうである哉一思案入りさうであると小首を傾けて更さま斯さま考へて見ましたか懸て雲時よして莞爾として微笑れハハと横手を拍つて獨り自ら謂つて云ふやうの 一ハ、ア讀めたワイ〜抑も濁川どの今出た水の濁れるに象り今出川と云ふことであらう借て又底抜柄杓どの彼の井の皮の底なき丁度底抜けの大柄杓の如くであると云ふ象り井皮町と云ふことであらうイデ然らバ我が推量の如く尋ね行きて見んとて翌日懸て其如く尋ね行きましたる果せる哉案は違はず今出川の井皮町と云ふ處は到り只見ますれば門は杓子を釣下げたる家がありま

するゆゑハ、ア成程杓子の頭の宛然掌を灣曲めて人を招くも男懸れば是れの人を招くの目標であるかスツカリ悟つて突と内は這入りますれば昨日の男出で來られて云ふやうの 或是れは〜和尚様よの能くこそお出で下さりました我等聊か思ある戯れを申し悉らせましたるよ一々も解分け道をも迷はず参られましたるの實は驚き入つたる天眼通でござります當代の活佛と云ゆるも無理ならぬことでござります先づ〜此方へ』とて座を請じましたが此の男一くせあるものよて何が奇難問を仕掛けんと思ひ構へてありました懸て法事も濟みますれば彼の男膳を出されまするよ一休やをら膳は向のれ亡者法味の爲め回向を爲して三界に手向と蓋を明けて見ますれば豈は圖らんや呆然々々々是れはしたり飯のあらで小糠でありました左れば一休の這の不思議と汁の蓋を取つて見ますれば亦是れも同じく小糠でありますれば一休の益々不思議と思ひ餘の椀等の蓋を開いて見ますれば皆小糠で其他の食物とて一物もござらぬ

ゆゑ一休ハタと横手を拍ッて云ふやう「ハ、ア是れの三七日よてござ
るか借ても歎かひしいこととござる」と申せバ彼の男之を聞いて愈々腹を
潰して云ふ「或左れバ仰せの如く三七日よてござります」と申して更ら
又色々佛事よ就いて物語をさされたさうでござるが借て此の皆頼
もて三七日を推した事の前も他の談話中よお話し申しましたるよ今又
此の男の事よ就て古來話し傳へてござりますが其原の孰れか一ツさのか
將た又二ツ別の話しがあるのか開の定かあらぬことですが若しも二回
ツたとすれば一休も亦何と此の皆頼の趣向の既よ二回出合つたる趣
を語り現のさねバあらぬことであるよ敢て左ることの話しも傳つて居
らぬのハナト不審のこととあります孰れども一寸一節ある最と面白き話
しであります

○一休の放屁論面白の春べや

或る一年一休旦那衆二三人と同道して東山邊へ遊山よ出でられました

しも春の彌生の半バでござりましたれば櫻樹の梢の頻りよ色着き染め苔
を破りて笑ひれ今ぞ盛りと見せましたれば三々五々の見物人の出の最と
多きこととありましたが爰に和尚等の一團の酒興よ乗じ手あを打ち叩
き頻りよ躍りはねて遊んで居りましたるよ開が中よ一人屁を放りて面白
がり笑ひ興じて居る旦那がありました其者の云ふやうの「或世よ如何
よ面白きものがあれバとて屁は面白きものなさいことである何人でも
放屁を聞いて怒るものなさいことと十人が十人の必ず可笑しがッて笑ふ
ことである皆さ〜何と面白きものでござらぬか」と言ひつゝ復た
〜と放たれますれば皆さ〜大いよ興よ入ッて雷の如く打ち笑ひれまし
たが一休之を聞いて云ふやうの「イヤ固より其等の事屁の面白くさく
て叶のぬことである左れバ昔より面白きこととあれバこそ頼も面白の春
べや面白の春べやと語ふこととあれバ今しも春の屁の面白きも道理のこ
とである遠慮なくス〜カ〜放たるゝが善いことである嗚呼又し

ても面白の春へやと諺にれますれば同行の者皆赤咄と打ち笑つて深き奥
よ入つたさうでござる

○一休終身の一大失敗

抑も一休終身の一大失敗とい何であるか至極たはいもさいつまらぬこと
のやうで至極肝要のことであれは努め忽ちあ爲し給ひぞ或る一年の事十
二月の末つ方偶々東山の吉田と云ふ所へ参られましたが
が歸るさに今出川口の河原を過られまするよ不圖見れば赤痢ある乞食が
伏して居られました一休の一目之を見てヤレ不憚のものやと思召されま
して身も纏へて居る小袖を一重脱いで之を與へられました左れば一休の
心の裡で竊かに思ふやうに彼れ定めて打ち喜ぶことであらうと思ひまし
たるよ案よ相違して彼の乞食の少しも喜ぶの氣色さく突然ツと手を通さ
れますれば一休乞食よ向つて云ふやうに「一休も汝の不思議ある乞食
でいさいか僅かよ一錢だよ貰ひ難有しとて伏し拜む乞食の習慣であ

るよ今汝の一重の小袖少しも嬉しくいさいか借てく奇妙な乞食である
と申せば彼の乞食の云ふやう「乞御身の我れよ小袖を呉れて嬉しくい思
ひれませぬか」と答へますれば一休のハタと手を叩つて云ふ「一休も我
等誤まつり一大事の悟り茲であるや如何さま汝の唯だの乞食よていよ
もあらじ汝一言の教へ我等の愚をしも覺しぬること最とく嬉しきこと
であるとして目を閉ぢ掌を合せて霎時伏し拜みて居りましたるよ良々嬉し
よとして目を明いて見ますればアラ不思議や彼の乞食の何地へ去りけん跡
方も見えず唯だ小袖ばかり跡よ残して居りました

○一休の豫言并よ永眠

活佛と云われたる一休和尚も普通人類の身を以つたることであれば終よ
時節到來風としたる疾痲より臥床よ就き段々ど重りて將に死かんとする
よ當り遺言して云ふやうに「我れ死して百年の後ち唐土より一人の禪
師來らば我が再來と思ひれよ借て又二百年よ當るの年我が死骸を墓中よ

二百八
り堀出して見られよ其時若しも我が死骸の朽ちてあらば我が言ひ置さし
言の皆きたはこととして開が書類の皆きたを火中へ投すべし左の去りあ
から我が死骸大方の朽ちまじと思ふことである』とやをら苦痛の中にも筆
を把つて日頃繪畫くことの巧みあるまゝ自ら己れの像を畫れましたが其
様を見てありませすれば頭の長髪として眼をキツト見出し薄紅の法衣を着
され丸竹の杖杖をつき椅子に腰打ち掛けて居るの休天晴聖僧知識とぞ見
えられました偕て又其畫像の上より自ら簀をせられました其簀よ
柳の緑花の紅

行脚事畢 今日時節 折主丈子 燒六月雪

虛堂之再來 天下老和尚 一休宗純 末期書之

と斯くせん書され右遺言の事も終りて後ち年齢八十八を一期として眼目
せられ永く歸らぬ眠れ就かれました此時一休の長髪を剃り丸めて埋葬さ
れましたが其剃りし毛髪は諸旦那弟子衆各々守袋に納め最と大切と所持

致されました偕て後ち一休の木像を作られました但其木像は和尚自書
の像に從ひ長髪も作られましたたれに鬻ぎも剃り落し各々守袋に納めたる
和尚自身の毛髪を其儘取り出して佛工に命じ頭髮眉毛に至るまで皆悉
く之を植えられましたたれば其木像宛然生けるが如く鬻ぎの自筆の畫像
と並べて好一對の肖像とあられました偕ても又彼の遺言の趣き後ち果し
て靈驗がありましたるや否や開の定かからぬことでござりまするが口碑
の傳ふる所も據りますすれば其後百餘年にして唐土より隱元和尚さん云へ
る禪僧の來朝せられたさうでござるが是れぞ即ち一休和尚の再來である
と當時の人の申傳へられましたたが今日開明の眼で見てハト受取難いこ
とでありませす孰れども一休の絶世の名僧知識で其滑稽洒落にして頓智も
富み深く禪道の極意を窮めまして此の苦しき世を楽しく渡り其樂天の道
をもて多くの人を導き濟度せられたるの最とくめでたきことであ
ります穴賢して數日の講談は局を結ぶことでござる

頓智 一休禪師終

明治二十九年四月八日印刷
明治二十九年四月十四日發行

一休禪師

講演者 西村富次郎
東京市京橋區南傳馬町一丁目拾四番地

印刷者 瀧川三代太郎
東京市日本橋區新和泉町一番地

印刷所 今古堂活版所
東京市日本橋區新和泉町一番地

發行所 弘文館
東京市京橋區南傳馬町一丁目拾四番地

1958

特 8

263

096472-000-7

特8-263

一休禪師 (頓智奇談)

瓢々亭 玉山 / 講演

M29

DBS-0185

